

地誌喜劇は時代を映す？：

『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性¹⁾

南 隆 太

1. はじめに

イギリスにおける鉱泉 (spa, wells) あるいは温泉文化 (spa culture) といえば、たいていの場合「風呂」(bath) の語源にもなっている「バース」(Bath) を思い浮かべるだろう。しかしながら、ローマ浴場の遺跡で知られる世界遺産のバースが、近代的な湯治場あるいは鉱泉リゾート地として本格的に発達したのは18世紀以降のことであって、1704年にバースの第二代儀典長 (Master of Ceremonies) に就任したボー・ナッシュことリチャード・ナッシュ (Richard Nash: 1674-1761) の大胆な改革によってはじめて、イギリスを代表する「地上の楽園」となったのであった (小林；蛭川)。しかし、その半世紀ほど前、17世紀後半にロンドンの貴族から市民まで多くの人々が集まった当時もっとも有名な鉱泉が、ロンドンから15.5マイル南にあるサリー州のエプソム鉱泉 (Epsom Wells) であった。現在でも「エプソム・ソルト」という名称が入浴剤の一種として売られているが、その由来はエプソム鉱泉の硫化マグネシウムを主成分とする鉱水であり、一時はヨーロッパでも広く知られ、飲料用にビン詰めにして販売されていたほどであった。バースが18世紀になってナッシュによって新しく創られたリゾート地であったとするならば、エプソム鉱泉はバース以前の古いタイプの鉱泉療養地であった。しかし現在ではすでに鉱泉も枯れて久しく、近隣住民でさえ知らないエプソム鉱泉は、国王が何度も滞在したほどの王政復古期の人気が想像できないほどに忘れ去られている。このことは、イギリスの温泉を取り上げたアラン・コルバンの『レジャーの誕生』第1章「イギリス人と余暇」の「温泉街から海辺へ」でも、この17世紀屈指の鉱泉が名前さえ出てこないことから想像できるだろう。

場所や空間に対する認識のありようは、個々人の体験によるところも大きいですが、その土地や空間に対する直接的な経験が限られる場合も、必ずしも一枚岩的なものでも安定したものでもなく、時代ごとにその土地をめぐる多様な言説によって創られ、修正され続ける (あるいは消え去る) ものである。道路網の拡充によって人々の移動がそれまで以上に活発になった17世紀において、王政復古期のエプソム鉱泉というロンドン近郊の新しい鉱泉リゾート地が急速に発展する過程で書かれたシャドウエルの同名の喜劇は、演劇という当時もっとも

地誌喜劇は時代を映す? : 『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性

重要なメディアの介入の一例として、土地や空間に対する認識あるいはイメージの形成や変容、さらには領有の在り方を考えるための補助線となるはずだ。本論は、トーマス・シャドウェル (Thomas Shadwell: 1642-1692) の喜劇『エプソム鉱泉』(1672年初演) に注目し、リチャード・パーキンソンの提案した喜劇のサブジャンルである地誌喜劇^{トポグラフィカル・コメディ}を再定義しながら、シャドウェルの喜劇を当時のエプソンに関する記述と比較することで、虚構である演劇が実在の場所を描くことが、その土地や空間の認識にどのように関わるのかを考えようとするものである。

2. 地誌喜劇^{トポグラフィカル・コメディ} (Topographical Comedy) とは何か

17世紀の演劇作品、特に喜劇には特定の場所や空間の名前を冠した作品が少なからずあることはよく知られている。恐らくベン・ジョンソンの『パーソロミュー・フェア』(1614) は最も有名な作品であろうが、このような場所の名前をタイトルにした作品の多くは、チャールズ1世の治世以降、内乱期を挟んで、王政復古期に書かれている。このことに注目したパーキンソンはサブジャンルとして「地誌喜劇」^{トポグラフィカル・コメディ}を提案し、またセオドア・マイルズはチャールズ1世の時代に書かれたキャロライン演劇 (Caroline Drama) について「地誌演劇」^{トポグラフィカル・ドラマ} (Topographical Drama) という名称を提案している (Miles)²⁾。パーキンソンやマイルズの定義にならうと、地誌喜劇^{トポグラフィカル・コメディ}としては次のような作品を挙げることができる。

チャールズ1世の時代 (内乱期以前)

James Shirley, *Hyde Park* (1632)

Richard Brome, *Covent Garden Weeded, or The Weeding of Covent Garden* (1633)

Thomas Nabbes, *Covent Garden* (1633)

Thomas Nabbes, *Tottenham Court* (1633)

Richard Brome, *The Sparagus Garden* (1635)

Thomas Jordan, *The Walk of Islington and Hogsdon* (1641)

王政復古期

Charles Sidley, *The Mulberry Garden* (1668)

William Wycherley, *Love in a Wood; or St. James's Park* (1672)

Thomas Shadwell, *Epsom Wells* (1672)

John Dover, *The Mall; or, the Modish Lovers* (1674)

Rawlings, *Tunbridge Wells* (1677/8)

Thomas Shadwell, *Bury Fair* (1689)

William Mountfort, *Greenwich Park* (1691)

William Phillips, *Saint Stephen's Green* (1700)

パーキンスンは^{トポグラフィカル・コメディ}地誌喜劇をジェイムズ1世の時代から続く都市喜劇 (city comedy) あるいは市民喜劇 (citizen comedy) の延長線上に考えられると述べているが (Perkinson, 270), これらのタイトルから明らかなように, その舞台の多くが公園や庭あるいは鉱泉など階級の異なる人々が集まる公共の場であり, かならずしもパーキンスンの指摘は適切ではないことがわかる。

このように特定の場所や空間が演劇作品のタイトルあるいは舞台として使われた背景には, 例えばコヴェント・ガーデンのように17世紀前半に大きく開発が進み新しい建物が建つようになっていたり, ロンドンの公園や近隣を歩いて移動することで得られる空間に関する知識や経験が, 労働とは関係のない文化的な意味合いも持つようになってきたことと関わっているのは間違いないだろう (Sanders, 172-77)³⁾。これは, 17世紀以降に数多く出版される「ロンドン案内」が, 地方から上京した者たちにロンドンでの処世術を伝授するといった当初の目的から, ロンドンの特定の場所で見べきものとその意義を説明する観光ガイドの要素を加えていった時代の流れとも結びついている。⁴⁾そして, ロンドンにやって来た「おのほりさん」が, 都会の人間にカモにされたり嘲笑的にされるといのは, 階級を問わず17世紀を通して多くの喜劇にみられる典型的な趣向であった。

パーキンスンは,^{トポグラフィカル・コメディ}地誌喜劇は, ある特定の場所に住まう (あるいは集う) 人達の行動を, その場所や空間にとって特徴的なものとして, 場と結び付けて描くと述べ (Perkinson, 270), 場所や空間によって階級によるある種の棲みわけが行われており, ある場所の名を挙げれば当時の観客はある程度その場についてのイメージを持つことができた (Perkinson, 271) とする。さらに続けて, 場所や空間をタイトルに使用するのは, その場所, 特に新しい場所などの宣伝のためか, 異性と関係を持つと^{イントリーグ}する策略や密通などが起こる場所としてちょうど良いという作劇上の理由, つまり演劇的な効果を得るために劇作家が常套的に使う道具立てであるとしている (Perkinson, 273-4)。これらの場所や空間の演劇的な機能を前提に, 都会と田舎との対立を論じるパーキンスンの議論が, 今日からすればあまりにも単純にみえるのは仕方がないだろう。ただ, 特定の場所や空間に演劇作品を設定することが, 作品をリアリスティックにすると同時にその場の特徴を誇張するためにかえってリアリティを損なう可能性があるという指摘は興味深い (Perkinson, 277)。なぜならば, 演劇的に表象される場所や空間の何を「リアル」だと感じるかは, 常に観客なり受け手がその場所や空間をどのようなものと理解しているかに深くかかわっており, 必ずしも自明のものではないからである。例えば, 1632年に初演されたシャーリーの『ハイド・パーク』は公園を舞台にした最初の作品であり, 上演された当時は人気を博した作品であった。この作

地誌喜劇は時代を映す? : 『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性

品が1668年7月に再演された際には、本物の馬を舞台上に登場させた記録が残っているが、これを観たピープスが1668年7月11日付の日記に記した「きわめて月並みな芝居」というそっけない感想(Pepys, 9: 260)は、ハイド・パークという空間の持つ文化的な意味が大きく変わっていること、馬を舞台にのせてもスペクタクルな舞台としての効果は期待できたとしても、同時代の観客にとってのその場所の意味作用と作品の描くイメージとの間に齟齬が生じていたことを窺わせる。パーキンソンに対して、「トボグラフィカルドラマ地誌演劇」としてチャールズ朝の演劇を論じたマイルズは、場所の名前は「写真的リアリズム」(photographic realism)のためであったとし、場所そのものが重要なのではなく、場所を指定することでリアルな舞台を作ることに重きを置いていたというのだが、チャールズ朝の舞台装置のありかた等を考えても、必ずしも説得力のある議論とはなっておらず、パーキンソンの議論からはポイントがずれてしまっていることは否めない。そもそも、風景を描いた背景幕とシャッターと呼ばれる左右の舞台袖から出る複数の書割を何度も使いまわすことで成り立っていた王政復古期の舞台装置を考えると、虚構である演劇作品が実在する場所を現実トボグラフィカル・コメディに即して描くことができたのかという疑問も出てくるだろう。それでも、トボグラフィカル・コメディ地誌喜劇という名称を持つ演劇作品は、舞台上に展開する「場所や空間のリアリティ」が何によって成り立つのかということを、常に問い掛け、その定義の見直しを迫る演劇として重要であることに変わりはない。

トボグラフィカル・コメディチャールズ朝の地誌喜劇に関する比較的最近の論考において、ポール・ミラーは、特定の場所や空間をタイトルにする演劇作品には、(1)さまざまな階級の人間が出会う場として説得力があり、さらに(2)すぐにわかるような同時代の場面設定は時事的な事柄への批判を有効にすると述べている(Miller, 350-51)。トボグラフィカル・コメディ地誌喜劇が描くのは都会と田舎の対立ではなく、むしろ郷土と国王あるいは宮廷との和解の可能性であるとし、その根拠としてトボグラフィカル・コメディ地誌喜劇はロンドン郊外のように特定の階級に属さない空間を舞台にしているのだとミラーは主張する。しかしながらこの議論が当てはまるのは、公園や郊外を舞台にした作品に限られ、ここにトボグラフィカル・コメディ地誌喜劇というジャンルの問題として論じることの限界があることは否めないだろう。

トボグラフィカル・コメディパーキンソンが提案した「地誌喜劇」が、チャールズ1世の治世と王政復古期に流行した演劇のサブジャンルであることは間違いない。それらの演劇作品は、観客や受け手が共有する場所や空間に対して持つイメージや認識を演劇的に機能させる契機として、特定の場所の名前をタイトルに使用していた。パーキンソンの議論を修正するとすれば、ある特定の場所や空間にたいするイメージや認識は、先行するさまざまな言説によって創造・想像されるものであり、トボグラフィカル・コメディ地誌喜劇が喚起するのは、現実の物理的な空間に対する観客や受け手の認識と、虚構としての演劇作品が創り上げる場所や空間のイメージ(あるいは認識)とが相互に交渉しあう場であり、そこに政治的あるいは文化的意味を読み込むことが可能になるのだ。『エプソム鉱泉』というトボグラフィカル・コメディ地誌喜劇を論じるにあたって、まずは17世紀後半の

エプソム鉱泉はどのような場所として描かれ、あるいは認識されていたのかを確認してみよう。

3. 描かれたエプソム鉱泉と想像されたエプソム鉱泉

エプソム鉱泉の発見については諸説あるが、一般には1618年と言われ、1621年には鉱泉を飲みに来る病人のために鉱泉の井戸の周りに小屋が建てられたという記録が残っている(Home, 43-44; Osborne and Weaver, 27-8)。1629年にエプソムを訪れたオランダ・東インド会社のエイブラム・ブースは、鉱水を飲みに行く者が訪れると記している(Abdy, 11)。内乱期も人々は鉱泉に来ていたのだが、特に注目を集めるようになったのは1660年の王政復古以降である。1662年にエプソムに来たオランダ人画家のウィリアム・シェリックスは、当時の様子をスケッチに残しているが(図1)、彼はエプソムについて「多くの人が訪れる非常に有名な場所で、大変居心地の良いところだ」と述べている。シェリックスの記述は、王政復古期のエプソム鉱泉が物理的にどのような場所であったかをわかりやすく描いている。少し長くなるが引用すると、その水は

健康に良いとして大量に飲まれており、(下剤として)浄化作用があるので、^{ストーンウェア} 焔器の瓶に入れて各地に送られている。鉱泉は壁に囲まれていて、地面はレンガで舗装されている。地面の中央部に穴が空けてあり、そこから水が出るようになっている。この井戸は小さな家の裏にあり、家の中には小さな部屋がいくつかあって、多くの人がここにやってきては鉱泉を飲み、またここで日差しを避けている。鉱泉を飲むのは、早朝から午前8時、9時あるいは10時までだ。鉱水は、何も食べていない空腹の状態、1ポイント(0.57リットル)入る焔器のジョッキで飲むことになっている。人によっては、一度井戸に来ると10か12ポイント、あるいは15、6ポイントを飲み干す人もいるが、とにかく誰もが飲めるだけの鉱水を飲むようにしている。そして飲んだら散歩をしなくてはならないのだが、これが非常によく効くので、さまざまな面白い結果をもたらすことになる。紳士も淑女も、それぞれに集合場所があり、それは茂みの中にあるのだが、その場所の周りにはぐるりと取り囲むように見張りが立っている。……このことを行う(鉱水を飲む)人々が大量に訪れるので、エプソムは300人が宿泊できるかなり大きな村にもかわらず訪問者を収容するには小さすぎるため、訪問客は近隣の村に宿を探さなくてはならない。医者に命じられて夏に数週間滞在する人たちは、毎日この鉱水を飲むのだが、多くの人は水を飲んだ後で、温かい肉のスープやビールを飲んで⁵⁾。

エプソム鉱泉を医者が治療に推奨した記録は多く、1668年6月29日には、海軍省秘書官で

地誌喜劇は時代を映す? : 『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性

あったサミュエル・ピープスに対して、ジョン・オーエンという男が医者 の指示によってエプソム鉱泉に滞在することとなったために12日間の休暇を希望したという記録もある(Home, 44-5)。このように、エプソム鉱泉での治療が王政復古期のロンドンにおいては、効果的な治療として認められていたことが分かる。

エプソム鉱泉はロンドンから15.5マイル(約25キロ)ほどの距離で、ロンドンの住民にとってそれほど遠い所ではなく、一般市民にとっても気軽に行ける場所であったようだ。翌日がセント・ジェームズの祝日なので、その前日の1663年7月25日の夕方になってエプソムに行くことに決めたピープスは、友人とエプソムへと出発する。日記によると「道はエプソムに向かう人やエプソムから戻ってくる人で混雑しており、ようやく目的地についてみると、町はいっぱいで泊まる場所がないと言われた」と書いている(Pepys, 4: 245)。翌7月26日の日記は次のように始まっている。

起きて鉱泉の井戸に向かう。井戸には非常に多くの市民がおり、身分の高い人もほかに何人かいたが、井戸にいた中では市民が圧倒的に多かった。多くの知り合いにも会った。我々は、それぞれ2杯飲んでから、歩いて井戸を後にした。とても面白かったのは、茂みのそこかしこで、誰もかれもが裾をまくって用を足している様子だった。女性用の場所では女性が同じようにしていた(Pepys, 4: 246)。

この引用の最後の部分は、シェリンクスが描いていた「さまざまな面白い結果」のことだ。翌日は朝7時に起きて、鉱泉井戸まで馬で行き、そこで鉱水を3杯飲んでから朝食を取り、ロンドンに戻ったとある(Pepys, 4: 248-9)。その4年後の1667年7月14日には、ピープスは妻や友人と、四頭立ての馬車でエプソムに来るのだが、午前5時過ぎにロンドンを出て8時までにはエプソムに到着したと日記に記している。さらに鉱泉井戸では4パイント飲んだために、便通が良かったと満足気に書いている(Pepys, 8: 336-7)。このように医者に勧められなくとも、多くの者が健康のためにエプソム鉱泉に行くことが流行していたのだ。だが一方で、健康のために鉱水を飲みすぎたせいで健康被害もあったかもしれない。同時代のもう一人の有名な日記作家ジョン・イーヴリンの2歳下の弟でエプソムの荘園主の娘と結婚していたリチャード・イーヴリンが1670年3月6日に亡くなったのだが、3月10日の日記には、弟の死後の解剖で腎臓や肝臓が悪かったことに加えて、膀胱から石が見つかったことに言及している。そして生涯にわたって頑健な肉体を持っていた弟の死は、全く健康で飲む必要がないのにエプソム鉱泉を大量に飲んでいたので原因だろうと書いている(Evelyn, 174)。過剰な健康志向はあるものの、治療を目的とした長期滞在者も少なからずいたエプソムのイメージは鉱泉保養地なのであった。

では『エプソム鉱泉』でも言及される鉱泉リゾートとしてエプソムの施設は、初演された

1672年頃はどのようなものであったのだろうか。『エプソム鉱泉』の劇中によく言及されるボーリング場 (bowling green) は1672年までには整備されていたようで、娯楽設備も少しは整い始めたようだが、ピープスが訪れた際に不満を漏らしていた時と変わらず、宿泊施設はいまだに十分ではなかったようだ。また鉱泉の井戸周辺の施設もシェリンクスの当時のままで、なだらかな丘陵地帯に小屋が建っているだけで、周囲の藪で用を足さざるをえないほどに満足な設備もなかった。17世紀後半から18世紀初頭にかけて鉱水に興味を持ちイングランドの鉱泉を回ったことで知られるシリア・ファインズ (Celia Fiennes) は、1690年にエプソムを訪れた際に、鉱泉の井戸の水が少なく黒く濁って気味が悪くて飲む気になれないことや、水がなくなると周囲の井戸から普通の水を持ってきて井戸に足しているのが治療効果がなくなってしまうと嘆いている (Abdy, 13-15; Osborne and Weaver)。エプソムが鉱泉リゾートとして施設が充実するのは1692年にロンドンの実業家が広大な土地を買って開発を始めてからであり、それまでは驚くほど粗末な状態であったようだ。

しかしながら、リゾートとしてのエプソム鉱泉のイメージは、かなり早くからロンドンにおける日常の規則から解放された放縦さと結びついていた。1667年7月14日に妻とエプソムを訪れたピープスは、エプソムにあるキングズ・ヘッドという宿屋に泊まり、エプソムに治療に来ていたギルスロップという知人に会うのだが、その今にも死にそうな様子からかなり重篤な状態なのだろうと日記に書いている。ところがその直前には、宿屋の隣の屋敷でバックハースト卿チャールズ・サックヴィルと後に国王チャールズ2世の愛妾となる女優のネル・グインがチャールズ・セドリーとともに浮かれ騒いでいる (keep a merry house) と記しており、エプソム鉱泉の保養地としてのもう一つの姿が想像できる (Pepys, 8: 337)。当時のエプソム鉱泉の放縦さの一面を最もよく表しているのが、1663年に出版されたパンフレット『エプソム鉱泉からの陽気なニュース』 (*Merry Newes from Epsom-Wells*) であろう。「妻を愛する男は、妻にエプソム鉱泉の水を飲ませてはならぬ」(8) という警告で終わる韻文で書かれた物語は、エプソム鉱泉にやって来た金細工職人が寝取られる話で、その正式なタイトルが物語をすべて説明しているので、表紙のページを以下に引用してみよう。

エプソム鉱泉からの陽気な知らせ：気の利いた重要なお話が語るのは、ロンドンに住む金細工師の妻が、そのお人好しな寝取られ亭主が鉱水を飲みに行っている間に、法律家と寝ることと、その法律家の妻が、ベッドで抱き合っている二人のところに早朝に大騒ぎで乗り込んでくる様子だ。さらに、その場にいた何百もの人に対して、その金細工師が妻を擁護するためにした愛情あふれるスピーチと、その場にいた人々が大声でののしり金細工師と妻を街から追い出したこと、そして立派な市民たちによる価値ある所見。

(2)

ここで描かれているのは、性的放縦の舞台としての鉱泉リゾートであるが、ここに書かれた「ニュース」を文字通りに受け取る必要はないのかもしれない。なぜならばこの「ニュース」というパンフレットの形式、そして性的放縦によって(仮想の)敵を厳しく批難中傷することは、このパンフレットが出版されるほんの数年前、つまり内乱期(1642-1660)に出版された数多くの政治的・宗教的パンフレットの一つの定型だったからである⁶⁾。むしろエプソム鉱泉に集まる王党派の貴族を中心とする人々をこのような形で描こうとする欲望の存在が興味深い。法律家は、多くの場合、貴族の子弟が大学を出てから就く職業の一つであり、金細工師の妻を寝取るという行為に、つまり間男と寝取られ亭主との関係に階級的な違いがあることは明白である。しかもこれは1663年頃から急激に発達するセックス・コメディとも称される王政復古期喜劇のサブプロットの典型的なパターンの一つでもある。内乱期(あるいは共和国)が終わってまだ3年しかたっておらず政治的安定の確立したとは言い難いイングランドにおいて、健康のためと称してして鉱泉に集まって浮かれるバックハースト卿チャールズ・サックヴィルのような存在が珍しくなかったことに対する感情の表れと言えよう。とはいえ、『エプソム鉱泉からの陽気なニュース』が提示しようとしているのは、性的に乱れた不道德な機会を提供する空間としてのエプソムであることは間違いない。

1662年のシェリンクスの描写と1663年の『エプソム鉱泉からの陽気なニュース』がほぼ同時期に書かれていたこと、さらにピープスをはじめさまざまな人間が、1660年代のそれぞれの立場からエプソム鉱泉について述べていたことをここでは確認するにとどめたい。重要であるのは、ここで挙げた少しの例には取まらない数多くの旅行記や鉱泉あるいはエプソムという町に関する記録や記述が存在し、それらが1672年の『エプソム鉱泉』初演時に流通し、作品の受容に大きな影響を与えうる状況にあったということであろう。

4. 『エプソム鉱泉』は何を描いたか?

1672年12月2日にドーセット・ガーデン劇場で初演された『エプソム鉱泉』は、その後3日、4日と続けて上演されたことから、当時としてはかなりの成功であったことがわかる。特に初日に観劇した国王チャールズ2世がこの作品を大変気に入り4日にも観劇したほか、この同じ作品が12月27日には宮廷のホワイトホール劇場でも上演されていることは、この喜劇がどれほどの高い評価を受けていたのかがわかるだろう(Borgman, 25-26; Boswell, 285)。『エプソム鉱泉』は、ロマンティックで風刺性の高い喜劇から、男女関係をめぐる笑劇的なドタバタが中心になる1670年代の喜劇の新しい流行の先駆的な作品とみなされることが多い(Hume, 295; Corman, 22-27)。まずは作品の概要を確認しておこう。

この喜劇は、登場人物の階級的にもプロットの点からも概ね3つの層からなっている。一番上にいるのは貴族か貴族の子弟にあたる層で、二人の若い貴族の放蕩者レインズとベヴィ

ルとその二人がそれぞれ恋に落ちるルーシアとキャロリーナ。ほかにキャロリーナとルーシアの親戚で、結婚した後も女性を漁る貴族のウッドリーと、夫にかくれて男と関係を持つとするウッドリー夫人がいる。実はベヴィルはウッドリー夫人とすでに肉体関係にあり、一方のウッドリーはキャロリーナを何とか口説こうとしている。このように、劇の冒頭から上の層の人間たちの道徳的な乱れが示される。次の層にいるのが郷士のクロッドペイト (clod = 間抜け + pate = 頭) と呼ばれる男で、サセックスで判事を務める地方の名士。若い頃にロンドンでひどい目にあってからロンドンを毛嫌いしており、エプソムには結婚相手を探してやってきたが、ウッドリーに紹介されたルーシアがロンドンの生活を好むことを知って諦め、最後は騙されて身持ちの悪さではロンドンで知らぬ者のいないジルト (Jilt = 浮気女) と結婚させられそうになる。3番目が市民の層で、菓子屋のビスケット夫妻と小間物商のフリブル夫妻が中心になる。ビスケットとフリブルの二人は、毎晩妻を放り出して飲酒と娯楽と賭け事に夢中で、ごろつきのキックとカフに金を巻き上げられたうえに、妻も寝取られてしまう。喜劇は結婚で終わることが慣例だが、この作品の幕切れは通例とはかなり違っている。レインズとルーシア、ベヴィルとキャロリーナの二組の男女はとりあえず友達になるということで、その後の結婚の可能性ははっきりとは示されない。一方のウッドリー夫妻は正式な別居が決まり、晴れて自由の身になることを皆で祝っている。クロッドペイトは、金を支払ってジルトとの結婚をかりうじて逃れ、ビスケットとフリブルは浮気をした妻を赦す一方で、寝取ったキックとカフを訴えて賠償金をとる算段をして喜んでいる始末で、裁判沙汰によって妻の不貞が世間に知れ渡ることには全く頓着しない。このように、『エプソム鉱泉』という喜劇は、結婚の破綻 (ウッドリー夫妻、ビスケット夫妻、フリブル夫妻) と結婚の回避 (クロッドペイト) を喜ぶところで終わる。本来喜劇が結婚によって幕を閉じるジャンルであるとする、『エプソム鉱泉』は逆転した祝宴によって幕を閉じるのである。

『エプソム鉱泉』の幕開きは、この喜劇がどのような場所を舞台にしているのかを具体的に示しているだけでなく、鉱泉井戸が階級を超えて雑多人々が集まる公共空間であることを明確に示している。まずは幕開きの5分足らずの場面を見ておこう。

ウッドリー夫人、ビスケット、ビスケット夫人、フリブルとその妻、キック、カフ、ドロシー、マーガレット、トビーその他が登場。鉱泉井戸で鉱水を飲んでいる。

ビスケット：本当に今日は快適な朝だ。昨日の夜は訳が分からなくなるまでしこたま飲んだから、水がとてもうまいよ。フリブルさん、1ポイントで乾杯だ。

フリブル：ビスケットさん、賭けてもいいが、私はもう8ポイントも飲んだよ。

ビスケット夫人：奥方様、こちらのお水はお体に合いますでしょうか？

ウッドリー夫人：もう、すばらしいわ。あなたは何杯飲まれたの？

ビスケット夫人：本当に、6杯頂きました。体の中を優しく通っていきますわ——

ウッドリー夫人：水の美味しい朝ですわね。

カフ：おいキック、どうだ？ 昨日の夜は酔っぱらってたよな？ 俺もなんだが、ひどく殴られたよ。

キック：酔っぱらったさ、キック。だが俺は殴られちゃいない。殴ったから。俺はクラレット赤ワインをすっきり流しに来たんだ。だが、お前の目の周りの黒いあざは流せないだろうな。

フリブル夫人：今朝は、奥様にお目にかかれて嬉しゅうございます。奥様は本当に若々しくて美しくいらっしゃいますね。奥様、それでは、ごきげんよう。

キック：あそこにいる白エプロンの女の子たちはどうしたんだ？ 駄けたり、跳んだり、踊ったりして。輪になって踊っている子もいるぞ。

キック：ロンドンのふしだらな女どもが、飛び跳ねて私生児を洗い流そうって魂胆さ。恥さらしにならないようにってな。

カフ：子宝に恵まれようって来るやつもいるのにな。

キック：まったくだ。ただし、それは鉱水のおかげじゃなくて、もっと他の名前も言えないヤツのおかげだな。

〈中略〉

フリブル：奥様の馬車はこちらに待たせておいでですか？

ウッドリー：先に行かせましたの。あとからのんびり散歩を楽しもうと思ひまして。

ビスケット夫人：奥様、おはようございます。お水はうまく通りましたでしょうか？

ウッドリー夫人：ええ、素晴らしいくらいに。失礼。（ウッドリー夫人は出て行く。）

ビスケット：キックさん、それにカフさんも、おはようございます。午後にポーリング・グリーンでお待ちしております。（1-2）

この幕開きの短いやり取りが最初に示すのは、エプソム鉱泉に集まる人間の種類と目的がいかに多様であるかということであり、ここでは少なくとも3つの側面が紹介されている。まずは当時の鉱泉井戸で階級を超えて同じ水を飲み会話を交わす人々の姿である。貴族の妻であるウッドリー夫人と小間物屋商や製菓商の妻とおなじ鉱水を飲み、その効果について挨拶代わりに話しているという様子は、エプソムの小さな鉱泉井戸を訪れた人間であれば誰も経験のあることであろうし、行かなくとも見聞きした光景であろう。このことが鉱泉リゾートの非日常性を醸し出しているのかもしれない。言い換えれば、このエプソムという町では、ロンドンでの社会的慣習や制約とは異なるルールが支配する世界であるということが示唆されているともいえよう。そのことは、拙訳ではおかしな表現になっているが、引用中の下線を引いた「水が通る」(waters pass) という表現が2回も出ていることとも関係してい

るだろう。これは鉱水が効いて体の便通が良くなることなのだが、排泄に関することが公共空間で堂々と話される場であるという設定は、実際にそうであるかどうかは別として、この喜劇における階級を超えた人と人とのやり取りを可能にしている。

本来は治療のためのエプソム鉱泉は、健康増進のためとしてロンドンから人々が押し掛けようになったわけだが、ここでは暇をもてあそぶ者たちが、深酒と喧嘩と賭け事に明け暮れる不健康な世界でもあることが提示されている。朝から8ポイント（約4.5ℓ）の鉱水を飲んだというビスケットたちは、シェリクスなどの描く鉱水治療の様子と一致しないでもないが、おそらく毎晩大量の酒を飲んで、早朝から鉱水を飲んで酔いを醒ましているという、とても体に良いとは思えない生活をエプソムで送っていることがわかる。2幕でフリブルを責めて妻ドロシーは「あなたはひどい人ね。私があなただけのことを心配しているのに、いつもどこかに出かけてしまうんですから。エプソンに来てから、私と一緒にいたのは1週間で2日しかないじゃないの」（26）という場面がある。エプソムで男たちは（そして女たちも）、パートナーから離れて自由に振る舞うのだ。

そしてロンドンからやってきたと思われるごろつきのキックとカフのやり取りから浮かび上がるのは、エプソムが持つかもしれない裏の世界だ。ロンドンから療養を口実にエプソムに逃れてきて子供を流そうとする若い女たちが飛び跳ね踊るさまは、外見の陽気さとは裏腹にその目的はグロテスクな様相を呈している。さらに子宝に恵まれるためにやってくる夫婦への言及も、同様である。シャドウエルの描くエプソム、あるいはエプソムに集う人々の行動や関係は、このように裏表のあるものとして描かれている。

エプソムを象徴する鉱泉の場面は冒頭だけで、ほかの場面は屋内や通りであっても特にエプソムの街や近隣の村を思わせる場面はない。これは、当時の劇場では、同じ背景幕やシャッターと呼ばれる書割を使いまわしていたので、屋内や街頭などの場面ではロンドンが舞台となる他の芝居と同じ背景を使っていたという事情もあるだろう。劇中ではエプソムの特定の通りや場所の名前ではなく「タウン」という言葉が何度も出てくるが、ロンドンの劇場で、ロンドンを舞台にした芝居で使用する背景を使った『エプソム鉱泉』を見る観客は、「タウン」というロンドンを想起させるが同時に特定の場所を指さない場所への言及によって、ロンドンとエプソムとが重なる眩暈のような感覚を抱くことになるだろう。それゆえ、劇中ではエプソムという場所の名前を繰り返し口にする必要が出てくるのだ。

偽の手紙や決闘、そして欲望を満たすための数々の^{イントロダクション}策略など、王政復古期喜劇で頻繁に使われる趣向に溢れる『エプソム鉱泉』が、その内容においては同時代のロンドンを舞台にしたセックス・コメディに倣うものであると同時に、『エプソム鉱泉からの陽気なニュース』の流れに沿うものであることは明らかだろう。この虚構に近い2つの世界がエプソムに重なっていることを最もよく表しているのが、4幕のルーシアとレインズの次のやり取りである。

地誌喜劇は時代を映す? : 『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性

ルーシア：でも、恐ろしいほど下劣な人でもない限り、エプソムの自由のおかげで、ほとんど何を^{スキャンダル}したって不道德だと言って大騒ぎになることはないのね。

レイNZ：いいですか、お嬢さん。この時代にスキャンダルなどというものは存在しないのです。今や破廉恥だという世間の非難は、世間の高い評価と同じくらい手に入れるのが難しいのですから。(Shadwell, 69)⁷⁾

ここでエプソムでの人々の自由な行動について、レイNZが王政復古期という時代の問題に一般化しているのに対し、ルーシアはエプソムという場所に特有の自由 (the Freedom of Epsom) と考えているのは興味深い。このルーシアの科白について、アルシッドは、エプソムの公の世界はロンドンよりも自然に近いのだとし、そこではロンドンとは違って日常の制約や雑務から自由なので、市民階級の人間でも時間のある富裕層を真似してボーリングや飲酒そして恋を楽しむことができるのだと指摘している (Alssid, 59)。しかしここで重要なのは、ロンドンとエプソムと類似性である。ロンドンを毛嫌いし、「ロンドンから来た人間とは、ロンドンの空気が体から抜けるまで、最初の2、3日は口を利かない」とか「ロンドンからこちらに風が吹くと、エプソムにいても気分が悪くなる」(6) と断言するクロッドペイトが、実際にはロンドンを中心とする政治体制や経済活動に依存して生きていることの滑稽さが副筋の中で示されるように、エプソムは、ロンドンから大量の人や物が流れ込む人気の鉱泉リゾートでありながら、それ故にこそロンドンの縮図とならざるを得ない実情を描いていると言えるだろう。ここで示されるエプソムは、エプソムであってエプソムではない、つねに新しい情報によって上書きが可能な空間なのである。

5. おわりに

1672年の初演時に大成功をおさめた『エプソム鉱泉』は、1726年までに30回上演されたが、その後は全く上演されることはなかった (Schneider, 759)。その背景にはエプソム鉱泉の衰退があるのだろう。1710年からしばらくエプソムに住んでいたジョン・トーランド (John Toland) は、1711年に出版した『エプソム描写：当地の気質と政治学』(*The Description of Epsom with the Humours and Politicks of the Place: In a Letter to Eudoxa*)の中で、エプソムは緑に囲まれた自然豊かなロンドン近郊の街であるとし、「その極めて健康に良い空気と素晴らしいミネラル・ウォーターのおかげで人々が頻繁に訪れる」と書いているが (Toland, 3)、全部で44ページにもなる文章の中で、実際に鉱泉について言及するのはたったの1ページ (26) で、体内を浄化してくれる下剤としてヨーロッパでも知られると述べる程度である。また、1712年頃に約20年ぶりにエプソムを訪れたシリア・ファインズは、エプソムの市街地の繁栄ぶりに驚き、市街に新しい鉱泉井戸ができて賑わっていると

記しているが、彼女自身は肝心の鉱水は飲まなかったようである (Abdy, 16; Osbourne and Weaver, 43)。この背景には、鉱泉リゾートとして知られたエプソムが、ただのロンドン近郊の避暑地へと変わってしまったことがあった。

エプソムの変容、あるいは避暑地としての発達には、1706年頃に移り住んだジョン・リヴィングストン (John Livingston) という医師を名乗った薬剤師によるところが大きい。商才のあったリヴィングストンは、市街中心部に新しい鉱泉井戸を掘り、それに合わせて周辺地区を再開発したために、手軽なリゾート地として栄えるようになっていった。しかし、この新しい「鉱泉井戸」から出る水には薬効がなかったため、客が古い鉱泉に行かないようにリヴィングストンが古い鉱泉井戸の土地を買い取り閉鎖してしまった (Home, 59-60)。その結果、エプソム鉱泉の評判が下がってしまったのだ。また、1720年代には「郷士はタンブリッジに、商人はエプソムに」 (Osbourne and Weaver, 46) と言われるほどロンドンに近いタンブリッジ鉱泉の方に人気が集まり、それに反して市民階級の集う鉱泉としてのエプソムの人気は陰りを見せていたのだ (Abdy, 17-18; Home, 59-60)。また、18世紀になって一層拡充した道路網の発達は、富裕層が余暇にバースのようなロンドンから遠く離れた地に移動することを可能にするようになっていた。そしてそこで求められていたのは、ポー・ナッシュが作り上げたような「地上の楽園」であって、寂れた昔の鉱泉リゾートでも、



図1 オランダ人画家ウィリアム・シェリクスが、1662年にエプソム鉱泉を訪れたときに描いたとされる鉱泉の井戸とその建物のスケッチ。小屋を出て四方に駆け出していく人も描かれていて、シェリクスの文中にある鉱水が効いたために「面白い結果」が出ている様子もわかる。http://www.epsomandewellhistoryexplorer.org.uk/EpsomSpa.html

地誌喜劇は時代を映す? : 『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性

市民階級が集まる避暑地でもなかった。

トポグラフィカル・コメディ
地誌喜劇というジャンルが、同時代に流通するその土地に関する多様な言説に依存し、またそれらの言説に介入することによって成立していたとするならば、1726年は『エプソム鉱泉』という喜劇が^{トポグラフィカル・コメディ}地誌喜劇として成立しなくなった年であるとともに、エプソム鉱泉という鉱泉リゾートが文化的な存在意義を失い、ロンドンから忘れられた時であるのかもしれない。その後のエプソムは、オークス・ステークス (The Oaks Stakes, 1779-) とダービー (The Derby Stakes, 1780-) の開催されるエプソム競馬場の街として新しいイメージを確立することになるのであるが、その時にはすでに鉱泉井戸も枯れ、そこに鉱泉リゾートの要素はなかった。

注

- 1) この論考は、2017年度東京経済大学個人研究助成(17-29)による研究成果の一部である。
- 2) 初期近代イギリスにおいて“topographical poetry”と呼ばれる詩の伝統があり、それが詩以外の散文などにも影響を与えていたことは、圓月勝博氏の指摘したとおりである(圓月212および281n)。ただし、“topographical poetry”が一般に「眺望詩」あるいは「地誌詩」と訳されることが多いのに対し、“topographical comedy”あるいは“topographical drama”という言葉で表現すべき演劇作品が日本語での紹介はもちろん、英米においてもこれまで十分に議論されることがなかったため、訳語が確立していないため、本論文では便宜的に「地誌喜劇」「地誌演劇」とする。
- 3) ジュリー・サンダース (Julie Sanders) は、本文中で列挙したようなチャールズ朝の演劇作品を取り上げ、「文化地理」「cultural geography」という視点から論じており、時代は異なるが地誌喜劇を論じる本論考にも参考になる。
- 4) 例えば、ロンドンで身を守るためのガイドブックとして1641年に出版されたHenry Peachamの*The Art of Living in London*は、その副題“A Caution how Gentleman, Countrymen and Strangers, drawn by occasion of businesse, should dispose of themselves in the thriest way, not onely in the Citie, but in all other populous places”が、当時の「ガイドブック」の目的を余すところなく示しているだろう。17世紀から18世紀初頭にかけてロンドンのガイドブックが、文学作品や絵画とも相互に密接に結びつきながら、時に不安を駆り立て、また時には猥雑な形で、ロンドンを訪れる者だけでなくその住民をも魅了したことは興味深い(Sanders, 172-174; 南:2002)。
- 5) William Schellinksのジャーナルからの引用は、Epsom & Ewell Local & Family History Centreが運営するEpsom and Ewell History ExplorerのEpsom Spaのページより引用。
<http://www.epsomandewellhistoryexplorer.org.uk/EpsomSpa.html>
- 6) 内乱期のパンフレットについては、南(2001)を参照のこと。
- 7) 『エプソム鉱泉』からの引用はすべて1673年出版の四折り版からとし、そのページ数のみ本文中に示す。日本語訳はすべて筆者による。

参考文献

- 圓月 勝博「ステュアート朝リゾート空間の詩学——ロンドンとエプソムの流動するトポグラフィ——」佐々木和貴編『演劇都市はパンドラの匣を開けるか：初期近代イギリス表象文化アーカイヴ2』ありな書房，2002年，201-250。
- 小林 章夫『地上の楽園パース——リゾート都市の誕生』岩波書店，1989年。
- コルバン，アラン『レジャーの誕生』渡辺響子訳。藤原書店，2000年。
- 蛭川 久康『パースの肖像：イギリス一八世紀社交風俗事情』研究社，1990年。
- 南 隆太「スペクタクル化する身体——一七世紀イングランドにおける「怪物誕生奇談」のゆくえ」末廣幹編『国家身体はアンドロイドの夢を見るか：初期近代イギリス表象文化アーカイヴ1』ありな書房，2001年，129-170。
- 。「演劇都市の幻視体験——アーカイブ前口上」，佐々木和貴編『演劇都市はパンドラの匣を開けるか：初期近代イギリス表象文化アーカイヴ2』ありな書房，2002年，7-12。
- Abdy, Charles. *Epsom Past*. Chichester: Phillimore, 2001.
- Allsidd, Michael. *Thomas Shadwell*. New York: Twayne, 1967.
- Anon. *Merry Newes from Epsom-Wells*. London, 1663.
- Borgman, Albert S. *Thomas Shadwell: His Life and Comedies*. New York: New York Univ. Press, 1928.
- Boswell, Eleanore. *The Restoration Court Stage (1660-1702), with a Particular Account of the Production of Calisto*. London: George Allen & Unwin, 1932.
- Canfield, Douglas J.. *Tricksters and Estates: On the Ideology of Restoration Comedy*. Lexington: Univ. of Kentucky Press, 1997.
- Corman, Brian. *Genre and Generic Change in English Comedy 1660-1710*. Toronto: Univ. of Toronto Press, 1993.
- Downes, John. *Roscius Anglicanus*. Eds. Judith Milhous and Robert D. Hume. London: Society for Theatre Research, 1987.
- Epsom & Ewell Local & Family History Centre. 'Epsom Spa' Epsom and Ewell History Explorer. <http://www.epsomandewellhistoryexplorer.org.uk/EpsomSpa.html>
2018年10月8日閲覧。
- Evelyn, John. *The Diary of John Evelyn*. Edited by Guy de la Bédoyère. Woodbridge: Boydell Press, 1995.
- Genest, John. *Some account of the English stage: from the Restoration in 1660 to 1830*. 10 vols. Bath, 1832; rpt. New York: Burt Franklin, 1965.
- Home, Gordon. *Epsom: Its History and its Soundings*. London: Homeland Association, 1901.
- Hume, Robert D.. *The Development of English Drama in the Late Seventeenth Century*. Oxford: Clarendon Press, 1976.
- Miles, Theodore. "Place-Realism" in a Group of Caroline Plays', *Review of English Studies*, no. 72, vol. 18 (1942), 428-440.
- Miller, Paul W.. 'The Historical Moment of Caroline Topographical Comedy'. *Texas Studies in Literature and Language*, vol. 32 no. 3 (1990), 345-74.

地誌喜劇は時代を映す? : 『エプソム鉱泉』(1672) にみる鉱泉表象とその喜劇性

- Osborne, Bruce and Cora Weaver. *Aquae Britannia: Rediscovering 17th Century Springs and Spas in the Footsteps of Celia Fiennes*. Malvern: Cora Weaver, 1996.
- Pepys, Samuel. *The Diary of Samuel Pepys, A new and complete transcription*, ed. by Robert Latham and William Matthews, 11vols. Berkeley: Univ. of California Press, 1970-83.
- Perkinson, Richard H. 'Topographical Comedy in the Seventeenth Century', *English Literary History*, III (1936), 270-90.
- Sanders, Julie. *The Cultural Geography of Early Modern Drama 1620-1650*. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2011.
- Schneider, Ben Ross, Jr.. *Index to The London stage, 1660-1800*. Carbondale and Edwardsville: South Illinois Univ. Press, 1979.
- Shadwell, Thomas. *Epsom-Wells. A Comedy, Acted at the Duke's Theatre*. London, 1673.
- Toland, John. *The Description of Espom, with the humors and politicks of the place: in a letter to Eudoxa*. London: 1711.
- Wheatley, Christopher J.. *Without God or Reason: The Plays of Thomas Shadwell and Secular Ethics in the Restoration*. Lewisburg: Bucknell University Press, 1993.